

農民芸術団「グループどろ」

グループどろは、高橋武が深く関わりを持ち、一時期の芸術理念を共有した芸術集団である。1957年に群馬県立勢多農林高等学校美術部の出身者によって結成された。まだ群馬に美術ギャラリーがない時代、美術に関心を持つ農家の後継者たちが、芸術活動の場の創出を試みたのである。1960年に開催された第1回展では、彼らは農道を発表の場とし、だれの目にも触れる開かれた展示の方法をとった。これには、地方における芸術の啓蒙の意図も含まれているのだった。周知のように、日本戦後史において60年代は、高度経済成長によって経済的な豊かさを獲得した時代であるとともに、これにともなう公害や格差の問題が表出し始めた時代でもあった。抑圧された地方で疲弊した人々の困窮はやがて、永山則夫による陰惨な連続殺人事件が象徴するような、さまざまな社会問題として噴出することになる。また小説家・中上健次という個性によって、地方の若者の鬱屈は「灰色のコカコーラ」や「十九歳の地図」として結実するのだった。グループどろもまた、これまで目を向けられてこなかった地方の現実に目を向け、その閉塞状況を芸術の創造力で切り開き、文化活動の活性化によって社会に対する批判性を醸成することを目的としていた。とりわけ野外での展示は、全国的に見ても他に類例がなく、独創的かつ先駆的な試みであったと言える。1963年の第4回展からは展示場を前橋

公園に移し芸術創造の可能性をより多くの市民に訴えかけるようになっていった。1968年に第9回展を行った後、解散した。

グループどろの活動は、現在ではほとんど記録に残っておらず、唯一の典拠は、吉田富久一『群馬における戦後、前衛美術運動の軌跡と行方』（群馬県立女子大学、2000年）のみである。